第３分科会

柿安シティホール

小ホール



第３分科会

会 場　柿安シティホール　小ホール

発表テーマと発表PTA

◆三国の20年後を見据えた“未来づくり”
～保護者・生徒アンケートからわかること～
／福井県坂井市立三国中学校PTA

◆P（ポジティブ）T（楽しく）A（明るい･温かい）活動を通して、
子どもも大人も笑顔に！
～PTA活動を「続けたくなる」組織にするために、今必要なこと～
／三重県東員町立三和小学校PTA

助　言　者

●東員町教育委員会　学校教育課　主査兼指導主事　　武笠　　主

講　　演

◆みんなで子育て　～東員町が考える学校運営協議会の型～

講 演 講 師

●東員町教育委員会　学校教育課　特命監　　辻　　哲哉

三国の20年後を見据えた“未来づくり”
～ アンケートからわかること ～

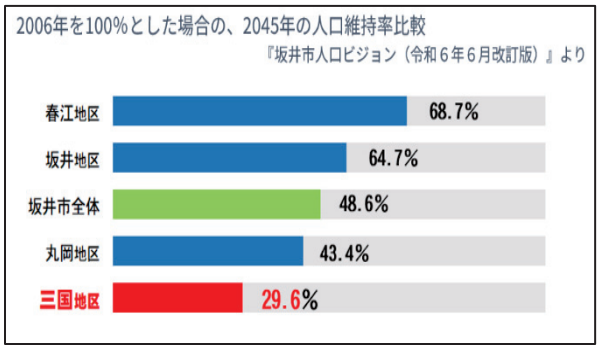
福井県坂井市立三国中学校
PTA会長　　石　谷　一　城

１　はじめに

(1) 地域紹介

坂井市は、福井県の北部に位置し、平成１８年に坂井郡の三国町・丸岡町・春江町・坂井町の４町が合併して誕生しました。市内には旧町域を学区とする５つの中学校が設置されています。私たちの住む三国地区（旧三国町）は、断崖絶壁の『東尋坊』や『越前がに』、そして300年続く『三国祭』で知られる、歴史と食の豊かな港町です。 祭りでは大人も子どもも一丸となって巨大な山車（やま）を曳き回す、そんな熱気あふれる地域です。 しかし、その三国地区に、今、ある「危機」が迫っています。

(2) 坂井市“人口ビジョン”より



坂井市が発表した人口ビジョンによると、私たちの三国地区は市内でも特に人口減少が著しいことが分かりました。2005年を100%とした場合、2045年の子供の数は『29.6%』。実に７割減という衝撃的な予測です。 これは他の地区と比べても突出して低い数字です。これを学校規模に置き換えてみます。 現在、三国中学校は１学年「5～6クラス」あります。 しかし、20年後の推計人口（約712人）から算出すると、１学年は約71人、わずか「2～3クラス」になってしまう見込みです。半分以下の規模になる。これが現実です。２０年後の三国中学校はどうなるのか？三国地区はどうなるのか？ この「20年後の現実」を前に、ＰＴＡとして何ができるか。 その第一歩として私たちは保護者と生徒への意識調査を実施し、分析することにしました。

２　ＰＴＡよりアンケートを実施

(1) アンケート概要

「20年後、人口が７割減る」というデータを前に、漠然とした不安を具体的な課題に変えるため、保護者と生徒、それぞれの「認識」と「本音」を調査しました。 実施は令和７年12月、全校生徒と保護者を対象に行いました。アンケート項目は以下の通りです。生徒・保護者それぞれに質問項目を作りました。

生徒用アンケート
- Q 三国地区の大幅な人口減少を知っているか。
- Q 人口減少が学校に及ぼす影響は。
- Q 人口減少が三国地区に及ぼす影響は。
- Q 将来どこで生活するか。
- Q 三国地区の魅力をどの程度感じるか。
- Q 三国地区の魅力をどこに感じるか。
- Q 子どもが三国地区を好きになる有効な取り組みは。

保護者用アンケート
Q 三国地区の大幅な人口減少を知っているか。
Q 人口減少が学校に及ぼす影響は。
Q 人口減少が三国地区に及ぼす影響は。
Q 子どもの将来の生活場所をどう考えるか。
Q 子どもの数が減少しないように学校としてできること。
Q 子どもの数が減少しないようにＰＴＡとしてできること。
Q 三国地区の魅力をどの程度感じるか。
Q 三国地区の魅力をどこに感じるか。
Q 子どもが三国地区を好きになる有効な取り組みは。

(2) アンケート結果

「人口減少を知っていますか？」という問いに対し、生徒・保護者とも「よく知っている」と回答したのは14%台にとどまりました。三国地区の人口減少については、生徒にも保護者にもまだ十分に知られていないことが分かります。アンケートから私たちが人口減少について心配する点は、全体的には生徒も保護者もほぼ同じ傾向でしたが、生徒の多くが「学校行事や地域行事の縮小」が高かったのに対し、保護者の心配はそれよりも「学校の統廃合・クラスの減少」という違いも見られました。また、保護者よりも生徒のほうが「将来、仕事や就職先が減る」ことを心配していることもわかりました。

(3) アンケートから見る三国の未来

特に注目したのは、定住意向です。「三国に魅力がある」と答えた生徒は９割にのぼります。 しかし、「将来住みたいか」と聞くと、その数字は２割まで激減します。 「好きだけど、ここには住めない」。このギャップの正体は一体何なのでしょうか。保護者も、子どもの将来の生活場所で三国地区と回答したのは２割程度でした。人口減少による地域の衰退を心配しながらも、子どもの意志を尊重したいという保護者の葛藤がうかがえました。自由記述には、より具体的な切実な声がありました。交通の便や店舗の少なさなど「三国で生活をすることの不便さ」に触れる声、「人口減少は避けられない」 という消極的な意見もありました。

(4) 三国を好きになるためには

その一方で、「三国を愛する人間は多い」「三国で頑張っている人を紹介すべき」「三国に関する授業を多くするといい」という前向きで熱い希望の言葉もありました。三国地区を好きになる取り組みとして有効と考えられることを聞くと「イベントへの参加・運営体験」、「地元食材を使った特産品メニュー開発」、「地域探訪プロジェクト」、「地域の人との交流事業」などが多くありました。

3 地域活動分析

(1) 三国中学校の取り組み

私たちはこの結果を踏まえ、三国中学校において三国地区に関連した活動がどうなのか調べることにしました。

改めて、三国中学校でどのような活動がなされているか調べたところ、地域に根差した活動が私たち保護者の認識以上に十分に行われていることがわかりました。

特に、総合の時間の中では、「ふるさと三国の魅力再発見」や「三国インフル

エンサーになろう」というテーマを設け、積極的に三国地区に関する活動をしていることを知りました。また、PTA 役員の企画として「三国花火翌日の親子清掃活動」や「三国の海女さんからの職業講和」を行った年もありました。

（2）小学校・高校の取り組み





さらに、三国中学校の先生方から、三国地区の他の学校にも照会をかけてもらったところ、学校ごとに、それぞれの地域に根差した活動を行っていることもわかりました。三国の中心部である北小学校や南小学校では三国祭をはじめとした伝統に関連した活動が行われていました。また、海に近い雄島小学校では、海産物を利用した活動なども行われていました。

県立の三国高校でも三国に関連した探究活動が行われています。



4　PTAができること

（1）結論　～アンケートより～

今回のアンケートなどから導き出された結論は３つです。１つ目は、無理に「引き留めない」こと。子どもの意志を尊重することが何よりも大切です。無理に引き留めることは、子どもの可能性をつぶすことになると考えます。２つ目は、「三国地区への愛着を高めていく」ための「体験」を作ることです。「三国でしかできない体験」こそが、将来の心のよりどころとなり、地域への愛着を高めていくことにつながります。そして３つ目は、そのために「学校へのメッセージを送ること」です。先生方の業務改善は我々もＰＴＡも協力して行わないといけません。一方で、三国地区への愛着を高める学校活動については、地域の中で様々な貢献・活躍をしている方と連絡調整をし、協力してもらうために、ＰＴＡが担う役割は、決して小さくありませ

ん。三国地区の将来に大きな影響を与える可能性もあるため、こういった活動を大切にしてほしいという思いをしっかり伝えていきたいと思います。

(2) PTA広報誌発行

三国地区の人口減少については、まだ十分に周知がされていません。各学校でどれだけ地域とつながった取り組みをしているかも十分に浸透していないと思います。また、今回のＰＴＡの取り組みを受け、今年度、三国中学校では「２０年後の三国を考えよう」を一つのテーマに総合の学習を展開するということになりました。

今回の取り組みでわかったこと、そして今年度の三国中学校の取り組みを、ＰＴＡ広報誌に掲載し、令和９年３月に全家庭に印刷をして届ける予定です。また近隣５校の小学校と三国高校にはデジタル版を配布する予定です。三国町全体で三国の未来について考える機会を作れたらと考えます。



【広報紙の表紙】

(3) 最後に　～自由記述から～

20 年後へのヒントは保護者の自由記述の中にもありました。子どもの頃の体験や地域への愛着が、地元に戻ろうという気持ちに、いつかつながることがあります。今後も、20 年後の三国のために、できることから取り組んでいきたいと思います。

20年後へのヒント　～保護者の自由記述の中から～

昔から三国の子は**地元が好きで外に出ても戻ってくる傾向が強い**ように感じ、これは祭りや伝統があり、地域愛を育てられているからだと思う。

三国でしかできないことを小学校や中学校で体験することは、いつまでも心に残ります。そういう体験は、三国に住み続けていると当たり前に感じますが、**一旦外に出るとそれは特別なことだったと気がつく**のです。…私は、幼少期の三国での生活が愛おしく思えたので、子供たちにもそのような経験をさせたくて、**三国に戻って来ました**。

育った場所、生きて来た場所が心地よければ、また**人はそこに戻ってくる**と思う。

Ｐ（ポジティブに）Ｔ（楽しく）Ａ（明るく・温かい）活動を通して、子どもも大人も笑顔に！
～ＰＴＡ活動を「続けたくなる」組織にするために、今必要なこと～

三重県員弁郡東員町立三和小学校ＰＴＡ
会長　　水　谷　佳　子

1　はじめに

(1) 地域の紹介

東員町は三重県北部に位置し、桑名市、いなべ市、四日市市に隣接しています。名古屋都市圏へのアクセスに優れた利便性を有しながら、豊かな田園風景が広がる自然環境に恵まれた町です。

また、「こども歌舞伎」「東員ミュージカル」「東員『日本の第九』」をはじめとする特色ある文化事業が地域に根付き、住民の手によって大切に継承されるなど、文化の薫り高いまちづくりが進められています。

さらに、「東員町16年一貫教育プラン」に代表される子育て・教育施策の充実にも積極的に取り組んでおり、胎児期から中学校卒業まで一貫した教育・子育て環境と、きめ細かな支援体制を整えています。

こうした取り組みは、子育て世代から高い評価を受け、多くの家族に選ばれる理由となっています。

その結果、東員町は大東建託㈱の「住み続けたい自治体ランキング（東海版）」1 位（2021～2024）、「街の幸福度ランキング（東海版）」2位（2021～2023）となるなど、住みやすさと暮らしの満足度の高さが広く認められています。

(2) 学校の紹介

三和小学校は、創立 137 年を迎える歴史と伝統ある学校です。校区の改編や学校の移転を経て現在に至り、本年度の児童数は、112 名と、町内6校の小学校の中で最も少ない人数となっています。

在校生の保護者や祖父母が卒業生であることも多く、校内には親戚関係の児童が在籍するなど、地域全体がお互いをよく知る温かなコミュニティが形成されていることが特徴です。

また、高学年で編成される鼓笛隊は本年度で第64代目を数え、本校の伝統として受け継がれています。運動会での演奏や隊形移動を取り入れた演技、近隣の大型商業施設でのミニコンサートは地域の皆様にも親しまれています。子どもたちは活動を通して伝統を受け継ぐ誇りを育み、その姿は下級生たちの憧れとなっています。

このように三和小学校は、地域との深い結びつきの中で、歴史と伝統を大切にしながら、一人ひとりの子どもを温かく育む学校として歩み続けています。

(3) PTA組織と活動

本校PTAは、本部役員5名（会長、副会長、



親代表、地域部長、研修部長）と、6年生保護者の地区委員、各学年の保護者学級委員を合わせた計15名が組織の中心となっています。

各役員は地域部または研修部のいずれかに所属し、地域部は登下校の安全・安心を確保するための取り組みを、研修部は基本的生活習慣の確立に向けた取り組みを中心に活動しています。

本部役員については、5年生保護者が副会長を務めた翌年度に会長へ昇任する仕組みとなっており、前年度の課題や取り組みを次年度へ円滑に引き継ぐ役割を担っています。

地域性にも恵まれており、PTA加入率は100%、PTA総会出席率は80%以上となっています。

2　子どもたちが関わる行事の縮小・見直し

(1) 児童数減少

本校の卒業生である保護者の話によれば、親世代の頃は現在よりも児童数が倍以上おり、授業参観等で小学校を訪れると、その変化の大きさに驚かされることが多いとのことです。

町全体としては子育て世代に人気のある地域である一方、本校区は市街化調整区域内に位

置しているため、新たに住宅を構える際の制約が多く、今後も児童数は減少傾向が続く見込みです。

また、兄弟姉妹で同時に在籍している家庭の割合が高いことから、児童数に比べて世帯数はさらに少ない状況にあり、この点も今後の学校運営を考えるうえでの重要な特徴となっています。

(2) 地域行事と学校行事の変遷

かつては各地区において「子供会」や寺社等の行事が行われ、子どもたちが心待ちにするイベントが数多く存在していました。しかし、時代の変化とともにそうした地域行事は見直され、「子供会」や「婦人会」などの団体が解散するケースや、地域の祭りから屋台が姿を消すケースも見られるようになりました。

本校においても、教職員の働き方改革、コロナ禍での活動制限に伴い、かつては授業参観に合わせて実施されていた親子行事（お楽しみ会）を廃止し、運動会は平日の午前開催に縮小、高学年のサマーキャンプも宿泊を伴わないデイキャンプへと見直されました。また、長年にわたり続いてきた三世代交流行事である「餅つき」についても、インフルエンザや胃腸風邪への懸念に加え、新型コロナウイルス感染症の流行の影響を受け、実施が困難となり中止となりました。

その後も、感染症対策や酷暑による熱中症予防の観点から、学校行事全体の在り方が継続的に見直され、昨年度、ついに子どもたちが楽しみにしていたデイキャンプも実施しないということになりました。

3　地域・学校行事の縮小がもたらすこと

(1) 失われつつある地域・学校行事の価値

これまで子どもたちのために、大人たちが時間と労力をかけて大切に築いてきた地域行事や学校行事は、単なるイベントではなく、世代をつなぎ、地域の絆を育む重要な営みでした。

しかし、こうした行事の減少・消失により、子どもたちが楽しみにしていた体験の機会が失われつつあります。「自分が子どもの頃に経験した楽しさを我が子にも」という世代間の継承の機会も減少し、子どもたちの笑顔に触れる場面そのものが少なくなっている現状があります。

(2) 人間関係の希薄化と子どもへの影響

地域・学校行事の縮小がもたらす影響は子どもたちにとどまりません。行事を通じて育まれていた保護者同士、あるいは地域と学校とのつながりも希薄になり、地域・学校の関係性の弱体化を危惧します。かつてPTA活動の中で見られた、保護者と教職員が協力し合いながら子どもたちのために楽しく取り組む姿は、子どもにとっての良きモデルであり、そのような姿を目にすること自体が、子どもたちの安心感や信頼感、すなわち「心理的安全性」を育む重要な要素となっていたと思います。

さらに、こうした「子育て共同体」的な活動の減少は、子どもたちの郷土愛や学校への愛着を育む機会の減少にもつながりかねません。地域や学校が「自分たちの居場所である」という感覚が希薄になることは、長期的に見て大きな課題だと思います。

本当にこのままでよいのでしょうか。今一度、子どもたちの健やかな育ちと地域・学校、保護者・教職員のつながりの在り方について、立ち止まって考える必要があるのではないでしょうか。

(3) PTA活動再構築に向けた意識の高まり

新型コロナウイルス感染症という正体の見えない感染症から命を守るため、世界中で約二年間にわたり、誰もが行動制限と我慢を強いられる状況が続きました。

その後、5類感染症への移行により行動制限は解除され、学校行事や地域行事も見直しを経ながら、かつての形を踏まえつつアレンジされた形で徐々に再開されていきましたが、一斉に行事が中止となった当初は「このままでよいのか」という不安もありました。一方で準備や参加の負担から解放され、「楽」を感じていた面があったことも事実です。

本校のPTAにおいても、コロナ禍を経て大きな見直しが進み、負担軽減の観点から活動を大きく縮小していきました。その中で、一部の役員からは「一度はPTA役員をやってみたいと思い参加したものの活動実感が持てなかった」との声も聞かれ、PTAの意義や在り方そのものを改めて問い直す契機となりました。

こうした経験を通じて、単に負担を減らすことにとどまらず、子どもたちのために保護者と教職員が関わり合い、協力しながら活動することの大切さを再認識する機運が高まりました。

その結果、PTA活動を見直し、より実質的で

意義のある形へと再構築していこうとする思いが芽生え、昨年度の大きな方向転換へとつながっていきました。

4　新コンセプトのもとPTA活動再始動！

(1)　R7 年度PTA総会での発表

新年度となり初めて開催された本部役員会において、会長からは「昨年度は何もやった気がしなかった」という振り返りとともに、「今年度は役員会や委員会など、顔を合わせて話し合う機会を増やしたい」との提案が示され、出席者全員の賛同を得ました。

PTAに対しては、「負担が大きい」「大変そう」「義務感が強い」といったイメージから敬遠されがちですが、そうした中で、経験者から語られた「やるなら楽しくやろう」という言葉は、本部役員の意欲を大きく後押しするものとなりました。

その後のPTA総会で会長から「P(ポジティブに)T(楽しく)A(明るく・温かい)活動を！」というコンセプトが提案され、承認されました。また、この方針は後日学校だよりにも大きく掲載され、全 PTA 会員へ広く共有されることとなりました。




令和7年度 PTA 総会

(2) 工夫と実践

役員会・委員会・各部会で会って話し合う機会を確保するため、授業参観後や教育講演会後の引き続きの時間を使って集まる工夫をしました。わが子の姿を参観した直後や、子育てに有益な講話の直後に集まることは、「子どもたちのために」、との前向きで活発な議論へ展開しました。

特筆すべきは、東員町PTA連合会と東員町教育研究の会共催の子育て講演会「子どもの自己肯定感を引き上げる方法(講師:石田勝紀氏)」の中で教わった「成長の見える化」を図るシステム(子ども手帳)を三和小バージョンとして直ちに取り入れたことです。

研修部が中心となり、講演を直接聞いていない保護者にも分かりやすい形で整理し、子どもたちが義務感で「やらされている」日々の取り組みを、自主的に「やってみたい」と感じられるようにする視点を反映させました。

これはまさに、PTA活動を継続可能なものとするために必要な視点と同じです。「やらなければ」ではなく「やってみたい」活動へ。新しいコンセプトにこの視点を得て、組織としての士気が上がり始めました。

5　PTA行事「星を観る会」

(1) 主催行事の立ち上げへ

2(2)でも述べましたが、R6年度まで学校行事として実施されていた高学年デイキャンプ(かつてのサマーキャンプを見直したもの)は、酷暑への対応や児童数の減少等の理由により、実施が見送られることとなりました。

そうした中、「楽しみにしていた子どもたちのために、PTAとして何か思い出に残る行事を実現できないか」という前会長の強い思いを受け、本部役員が中心となって新たな取り組みを企画しました。

そして生まれたのが「星を観る会」です。子どもたちにとって心に残る体験となることを願い、PTAによる新たな活動として立ち上げられました。

(2) 主催者の思い−星を観る会、企画の歩み−

実施日は2学期終業式の日と定められ、本格的な企画会議が始まったのは秋頃でした。空気が澄み、天体観測に最適な時期に合わせ、星のソムリエ(星空案内人)をゲストティーチャーとして招聘することにも成功し、会のメイン企画が決定しました。

本企画では、非日常的な体験を子どもたちに提供すること、保護者同士のつながりを深めPTA活動への理解を促すこと、そして継続可能な運営モデルを構築することを目的として掲げ、実現に向けて検討を重ねました。


企画会議

企画会議では、役員自身の小学生時代の楽しい思い出を振り返りながら、「わが子にも同じよ

うな体験をさせてあげたい」という思いが多くの意見として出され、アイデアが活発に交わされました。その中から検討・精選を重ね、最終的に以下の7つのイベントで構成することとなりました。

①焼きいも　②大声コンテスト　③スリッパ飛ばし
④唄きうまい棒　⑤星を観る会　⑥校内肝試し
※サプライズとして
⑦保護者有志による合奏と合唱（手話を入れながら）
♪世界に一つだけの花♪

(3) 成功のポイント

ア　地域とのつながり

大声コンテストでは、東員町青少年育成町民会議から機材をお借りし、進行にもご協力いただきました。日頃より「あいさつ運動」や「ありがとうの花を咲かせよう運動」などを通じて、子どもたちの成長に深く関わっていただいている地域団体の協力を得られたことは、本行事を継続可能なものとするうえで大きな意義を持つものでした。

イ　保護者間のつながり

プログラム決定後、対象となる5・6年生への周知とともに、保護者スタッフを急募しました。その際に心がけたのは、参加のハードルをできる限り下げることでした。準備や打合せへの参加が難しい方や、途中参加のみ可能な方でも関われるよう配慮し、役員による個別対応や、状況の近い保護者同士の伝言など、丁寧な連絡体制を整えました。

こうした手間を惜しまない対応が、主催者の思いをリレーのようにつなぎ、全体の一体感を高める大きな推進力となりました。サプライズ企画として実施した保護者有志によるステージも、この流れの中で大きな成功を収め、2 部合唱や演奏、手話など多彩な内容で子どもたちを大いに楽しませました。

限られた準備期間にもかかわらず、保護者同士が柔軟に連携できた背景には、小規模校ならではの強みもあったと考えられます。保護者間


保護者サプライズ

のつながりを強めるという当初の目的が達成されたことは、主催者にとっても大きな喜びとなりました。

ウ　子どもも大人も笑顔

そして何より、関わった大人全員が笑顔で、子どもたちと同じように心から楽しんでいたことが最大の成果でした。子どものための活動であると同時に、大人自身も元気をもらえる取り組みとなり、まさに双方向に価値のある行事であったと確信しています。

6　まとめ（声を大にして言いたい！）

(1) 今後のPTA活動に必要なこと

「星を観る会」終了後には、子ども・保護者の双方から多くの感想が寄せられました。「子どもも大人も楽しめた」「都合がつけば次回はスタッフとして関わりたい」といった声は、今後の継続開催への大きな励みとなるものでした。

今回の活動を通して得られた最大の学びは、PTAは特別な人だけのものではないということです。関わることで笑顔が生まれ、感謝が循環し、PTAは「負担」ではなく「つながりの場」へと変わり得るという実感を得ました。

「P（ポジティブに）T（楽しく）A（明るく・温かい）活動」というコンセプトが、今後も子どもたちと保護者をつなぐ大切な指針として受け継がれていくことを願います。

(2) PTAという組織の本質


R7事務局

ＰＴＡとは、保護者と教職員が子どもたちのために、そして同時に自分たち自身のためにも、つながり合いながら活動できる場です。そこには「共感」「共汗」「共歓」があり、同じ目的に向かって力を合わせることの喜びがあります。

共に感じ（共感）、共に汗をかき（共汗）、共に喜び合う（共歓）ことのできる組織であることこそ、PTA の持つ本来の価値であり、その素晴らしさを改めて実感する機会となりました。

この経験を通して、PTAが単なる役割分担の組織ではなく、人と人とが温かくつながる「学びと成長の場」であることを、これからも大切に伝えていきたいと思います。